

# 就職活動への動機づけを妨げる誘発性と時間的展望 —就職活動に躓いた女子大学生1名のPAC（個人別態度構造）分析—

松浦美晴\*・上地玲子\*

## Time Perspectives and Valence Impeding Job Hunting Motivation: A Personal Attitude Construct Analysis of a Female Student Who Hesitated at the Start of Job Hunting

Miharu MATSUURA\* and Reiko KAMIJI\*

The purpose of this study was to explore the factors motivating university students faced with the task of job hunting. An interview survey using Personal Attitude Construct (PAC) analysis was conducted with a female student who could not carry on job hunting despite her cognition of necessity of doing it, in order to explore her time perspective and valence. The results revealed two clusters representing opposite directions of valences; one representing negative valence with “factors impeding motivation”, and the other representing positive valence with “clarification of goal”. The negative valence was linked to her past perspective, whereas the positive valence was linked to her current and future perspective.

**key words:** university students, job hunting, motivation, valence, time perspectives

### 目 的

大学生の就職活動には、自分に合った職業の選択、将来の生活を考えるなどの「自己と職業の理解・統合」と、就職面接の対応、大学の就職係や職業安定所の利用、採用先との連絡、メディアを通じた情報収集などの「就職活動の計画・実行」がある(浦上, 1996)とされる。前者は、就職活動を意思決定過程としてとらえるアプローチ(西村・種市, 2011; 都筑, 2007)によって研究が進められてきた。また、「進路を決定できない状態」は「進路未決定」という概念で表され(下村, 2001)、尺度が開発されている。しかし、後者の「就職活動の計画・実行」についても研究が必要である。

一方、職業や進路の選択には、自分の過去・現

在・未来を統合し時間的展望を確立し将来目標を立てることが不可欠であり(都筑, 1999)、職業選択研究には時間的展望の視点が必要(奥田, 2004)とされる。時間的展望は「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(Lewin, 1951 猪股訳 1979)、「長期にわたる行動の一連の連鎖とその結果を予期的に表象したり、過去の行動の連鎖のまとまりと結果を想起することによって、現在の行動を動機づけるという働きをとらえる概念」(白井, 1995)等と定義される。白井は、時間的展望の理論が、動機づけへの関わり方によって、現在の行動を目標実現の手段として意味づける未来志向的な理論と、未来や過去の展望が現在の行動を統制し直接的状況からの自由を獲得しようという現在志向的な理論に分かれるとした。安達(2004)

\* 山陽学園大学総合人間学部

Faculty of Human Sciences, Sanyo Gakuen University, 1-14-1 Hirai, Naka-ku, Okayama-shi, Okayama 703-8501, Japan  
e-mail: mmatsu@sguc.ac.jp

は、心理的な指標が測定する学生の就職への意識と、目に見える態度や行動の間に乖離があると述べた。そのような、動く必要があるとわかっていても動けない状態を説明するには、目標-手段という論理的・戦略的な構造を持つ未来志向的な時間的展望の理論では難しい。大学生の就職活動を現在志向的な時間的展望の理論からとらえることも必要といえる。

現在志向的な時間的展望の理論としてLewinの理論がある(白井, 1995)。Lewinは、積極的誘発性、消極的誘発性、それらによる葛藤からなる力の場(Lewin, 1935 相良・小川訳 1957)という概念、さらに、「心理学的な場における何等かの行動または何等かの他の変化は、その時における心理学的場のみ依存する」という「場の理論」(Lewin, 1951 猪股訳 1979)を提唱し、心理学的未来や心理学的過去からなる時間的展望も、現在の行動を動機づける現在の「場」となるとした。大学生が就職活動において行動を起こすには、個人の中で生じる力の「場」が動機づけにつながらなくてはならない。こうした観点から松浦(2015)は、就職活動を順調に進めた大学生1名の事例を報告した。そこでは、就職活動が積極的誘発性と消極的誘発性をともに持つ両価性のものであった。そして、どちらの誘発性も就職活動へのやる気を強める、弱める両方の働きを持つイメージが語られた。そして、消極的誘発性を持つものに挑戦し乗り越えようとする動機づけが、過去の経験から生じたことがうかがえた。しかし、本来問題となるのは、活動を順調に進められない大学生である。本研究ではそうした事例を検討する。

就職活動を進められない大学生にとっても、就職活動は内定獲得の手段としての積極的誘発性と不愉快な情動を伴う負の誘発性を合わせた両価性となるはずである。消極的誘発性を持つものを乗り越えようとする動機づけが働けば、行動としての就職活動に進めるはずだが、動けない大学生においては、そうした動機づけが働かないと考えられる。そこには心理学的場のどのような力関係が働いているのだろうか。またその力関係には、過去や未来への展望がどのように関わるのだろうか。本研究の目的は、現在志向的な時間的展望の理論からそれらを検討し、展望される過去や未来が阻害要因となって行動を起こせずにいる大学生を動機づけるための示唆を得ることである。しかし、1人の人間の主観内で起こっ

ている力関係を、集団データで数量的に分析することは難しい。質的なアプローチが必要となる。

荒川・安田・サトウ(2012)は、質的研究の一手法である複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: TEM)が「何人のデータを扱うか」という問題について、1人であれば個人の経験の深みをさぐることができ、 $4 \pm 1$ 人であれば経験の多様性を描くことができ、 $9 \pm 2$ 人であれば(TEMの扱う)径路の類型を把握することができるとした。この考え方を参考に、本研究では対象者1名の事例を深く検討することを計画した。手法として、個人の態度やイメージの構造を分析するPAC(Personal Attitude Construct)分析(内藤, 1997)を用いた。PAC分析では、実施者が呈示した刺激について対象者が自由連想した項目に対し、対象者による項目間距離評定にもとづくクラスター分析を行う。内藤(2008)によれば、構成される各クラスターを心理的な「場」、クラスター同士の連結を場から場への移動とみなすことができる。

本研究は、就職活動を順調に進められない、すなわち、就職したいという意識と行動の側面としての「就職活動の計画・実行」が伴わない大学生1名の心理学的「場」についてPAC分析を行った。積極的・消極的誘発性の時間的展望上の位置づけと、それらが行動へのやる気とどのように関わるのか、さらには、それらが就職活動を順調に進めた大学生の事例とどう異なるのかを検討し、行動を起こせない大学生一般を支援するための示唆を得ることを目的とした。

## 方 法

### 調査協力者

本研究の目的から、対象に必要な条件は、(1)就職したいという意識を持ちながら、(2)行動としての就職活動を順調に進めることができない大学生ということになる。そこで、4年制大学であるA大学において、大学就職支援センターからの情報をもとに、日本人大学生1名に対象者としての調査協力を依頼した。文系学部在籍する女子大学生であった。4年次の2月上旬に本人に就職活動の過程をたずねたところ、次のようであった。

まず、3年次在学中の12月に就職活動を開始した。大学のキャリアセンターが行う面接練習に参加し、その後は合同同企業説明会や企業説明会に参加

した。しかし、大学の春期休暇に入り「やる気が自然と失われ」「卒論などで時間が取れず」「遊びたいという気持ちが強くなって」活動を休止したという。活動はしないものの4年次在学中の6月ごろからハローワークで「話とか聞いてもらったり」するようになった。活動の必要性を意識としては持ち続けていたと考えられる。行動としての就職活動を再開したのは4年次の1月であった。介護の仕事に興味を持ち、合同説明会に参加したということであった。

この内容から、(1)一旦就職活動を開始したことから就職したいという意思があったと判断でき、(2)4年次進級前の春期休暇中から4年次の6月に入る前まで行動としての就職活動を進められなかったという点から、本研究の対象者としてふさわしいと判断された。調査時期は4年次の2月上旬であったが、これは、就職活動の経過を事後的に確認したうえで協力を依頼する必要があったためである。

研究の目的、方法を文書と口頭で説明し、文書により協力への同意を得たうえで、2回のPAC分析を約1時間の間隔を空け実施した。調査時点において協力は内定を得ておらず、就職活動中であった。

#### 手続き

**第1回実施** 内藤(1997)のPAC分析の手続きは、「刺激に対する対象者の自由連想」「対象者による連想項目間の類似度評定」「類似度距離行列を用いてのクラスター分析とデンドログラムの作成」「デンドログラムにもとづく対象者によるイメージの報告」「総合的解釈」からなる。内藤は、PAC分析で発見したい変数がイメージとして浮かぶよう、連想刺激によるコントロールを勧めている(内藤, 2008)。例えば、内藤(1993)では、大学生の就職への態度における、個々人に特有な構成要素と構造を検討するため、「職業や就職に関連して連想される言葉やイメージ」という連想刺激を用いている。

本研究の第1回実施では、就職活動を促進・抑制する要因の抽出を目的とした。「就職活動のやる気を強めたもの、弱めたもの」を尋ねる刺激文によって対象者が自由に連想した項目について、対象者に項目間距離評定を求めクラスター分析を行い、デンドログラムへの対象者のイメージを分析した。具体的な手続きは次の通りである。①刺激文「就職活動において、あなたのやる気を強めたり弱めたりしたものと、どのようなものがありましたか。頭に

浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」を協力者に口頭と文書で提示し、自由連想を求めた。②協力者に、連想した項目の重要度順位を評定するよう求めた。③協力者に、連想された項目間の距離を7段階で評定するよう求めた。④項目間距離行列をもとにクラスター分析(Ward法)を行い、デンドログラムを作成した。⑤協力者に、デンドログラムのイメージを報告するよう求めた。⑥項目単独について、+ (肯定的)、- (否定的)、0 (どちらともいえない)のうちいずれのイメージがあてはまるかをたずねた。⑦最後に、実施しての感想をたずねた。

**第2回実施** 1時間後に行った第2回実施では、第1回実施で抽出された就職活動の促進・抑制要因について、過去、現在、未来からなる時間的展望との関わりを探索することを目的とした。具体的な手続きとして、①協力者に、第1回実施で連想された項目と、時間を表す時間項目「自分の過去(就職活動開始前)」「自分の現在(就職活動開始から大学卒業まで)」「自分の未来(大学卒業後)」(これらは括弧内も項目に表記)の3項目との間、および3つの時間項目間で、距離を7段階で評定するよう求めた。連想項目間の距離は第1回実施のものを用い、改めての評定は行わなかった。第1回実施で得られた誘発性のイメージをできるだけ崩さずに時間項目との位置関係をとらえるためである。②第1回PAC分析の自由連想項目と新たに加えた時間項目を同列に並べた項目間距離行列をもとにクラスター分析(Ward法)を行い、デンドログラムを作成した。③協力者に、デンドログラムのイメージを報告するよう求めた。④項目単独について、+、-、0のうちいずれのイメージが当てはまるかをたずねた。⑤協力者に、実施しての感想をたずねた。⑥協力者に、1回目のデンドログラムと比較して、気づくこと、イメージとして浮かんでくるものをたずねた。

協力者に就職活動の促進・抑制要因のイメージを求めるとき、同時に時間的展望との関わりイメージを求めてしまうと、要因のイメージを十分に探索できない恐れがあったため、本研究ではこのように、2回に分けて実施した。

クラスター分析に統計ソフトKyplotを使用した。このソフトでは、距離行列の左列・上の行に入力された項目がデンドログラムの下方に配置される。

**Table 1** 協力者の距離評定から得られた項目間距離行列（最初の行列の数字は自由連想項目を重要度順位で表す。「過去」「現在」「未来」は時間項目を表す。第1回実施では自由連想項目間の距離を得、クラスター分析に自由連想項目間距離行列のみを使用した。第2回実施では自由連想項目と時間項目との距離，時間項目間の距離を得，クラスター分析に時間項目を含めた全体の項目間距離行列を使用した）。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	過去	現在	未来
1	0												
2	1	0											
3	3	2	0										
4	1	3	1	0									
5	3	1	1	1	0								
6	7	7	3	7	4	0							
7	3	7	5	2	4	1	0						
8	5	5	5	5	5	1	1	0					
9	6	6	6	7	7	1	1	1	0				
10	6	4	3	5	6	1	1	2	1	0			
過去	7	3	6	3	3	1	6	1	3	5	0		
現在	1	1	4	3	6	1	4	1	6	1	1	0	
未来	1	1	2	3	7	7	5	1	7	6	7	2	0

結 果

第1回実施

項目間距離行列を Table 1 に示す。最初の行列の数字は自由連想項目を重要度順位で表す。「過去」「現在」「未来」は時間項目を表す。第1回実施では協力者から表中の自由連想項目間の距離のみを得，その行列をクラスター分析に使用した。

第1回実施のデンドログラムを Figure 1 に示す。丸数字は項目の連想順位，縦軸の数字は項目の重要度順位，(+)は項目単独の肯定的，(-)は否定的，(0)は中立的イメージを表す。

上から2つ目の項目の〈就職活動情報サイト〉には，実在のサイト名が書かれていた。「(強めた)」「(弱めた)」は，協力者の記述のままである。上の5項目をクラスター1，下の5項目をクラスター2に分けることを実施者が提案し，協力者が同意した。項目単独のイメージは，クラスター1はすべて否定的なイメージ，クラスター2は4項目が肯定的イメージであり，「友人の内定が決まった時(強めた)」のみが中立的イメージであった。クラスター2に重要度順位上位の項目が集まった。

協力者によるクラスターの解釈 〈 〉内の斜体字は協力者の発言，《 》内は実施者による補足である。

クラスター1: 〈拒否〉。もう，就活への拒否〈面倒〉〈人と会うのにイライラした，(笑い)，ウザ

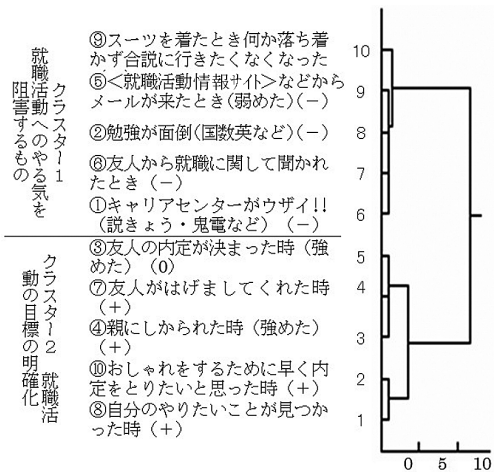


Figure 1 第1回のデンドログラム（縦軸数字は重要度順位，丸数字は連想順位）

イと思って，誰しもウザイ，みたいな。特に，ここね…「友人から就職に関して聞かれたとき」のは，…このときは，ほんまに会いたくなかったですね。クラスター2: 〈家族や友人の支えがあったって感じですね〉〈全部，プラスだな〉〈全部，自分のためみたいな感じですね〉〈友人の内定が決まった時〉はちょっと違うけど〉〈はげましてくれたりしかってくれたり〉〈おしゃれをするのも，自分がしたいからです〉〈自分のやりたいことがあるので，自分がなってみたりやってみたりみたいな〉〈第三者から自分に向けてのもの〉〈友人の内定が決まったと



き「友人がはげましてくれた時」「親にしかられた時」と、自分の、自身からのもの《「おしゃれするために早く内定をとりたかった時」「自分のやりたいことが見つかった時」》〈結局、それらも1つにまとまって〉。クラスター1と2の比較：〈上《クラスター1》は明らかにマイナスのイメージ〉〈下《クラスター2》はプラスのイメージ〉〈全部正反対のことを言ってますよね〉〈「友人から就職に関して聞かれた時」と「友人がはげましてくれた時」、別の人物なんですけど〉〈「励ましてくれた友人は」ほんまにいつも一緒におるメンバー〉〈「就職に関して聞かれた友人は」何か月にいっぺんしか会わない人〉〈人によってはシャットダウンするんですよ、自分が。その人に該当してるみたい〉〈種類が違うんじゃない、こっちの友人とこっちの友人〉〈親は肉親だから、自分をちゃんと知ってくれてるから〉〈キャリアセンターはもう、なんも考えてないっていうか、自分らのことしか考えてないみたい〉〈ちゃんと自分たちが、こういうのしたくないとか、こういう職種は嫌ですって言うてるのに、それを聞き入れてないっていうか〉〈親は、自分のために言ってくれてるんで〉〈「キャリアセンターは」違うじゃないですか《苦笑》。全体のイメージ：〈「2つのクラスターは」平行やなーって思います〉〈とにかく、対照的な意見としか出てこない〉

**補足質問** 「スーツを着たとき何か落ち着かず合説に行きたくなくなった」について詳しく：〈そういうピッチリした服とか着ないから、なーんか気持ち悪いんですよ〉〈ましてやなんかあの、カバンとか持ちたくないんですよ、手に持ちたくないんですよ、いつもうち、背負ってるじゃないですか、リュックとか〉〈きつめの服を着る、カバン持つ、ヒール！ 全部！ 嫌なんですよ〉〈2年か1年のときに、電車の中で倒れたんですよ、スーツ着て〉〈スーツ着たら、あのときもスーツ着て倒れたとか〉〈思い出しちゃうんですよ、なっさけねえ自分みたい〉〈倒れることが情けない、ていうか〉〈自分まあ、ねえ、倒れるイメージないんで、倒れて自分でショックでしたよね《苦笑》、なんか、もっとしっかりした…。「就職活動情報サイト」などからメールが来たとき「勉強が面倒」「友人から就職に関して聞かれたとき」「キャリアセンターがウザイ!!」の4項目の結節と、それを包括するような

「スーツをきたとき何か落ち着かず合説に行きたくなくなった」の結節について：〈第三者からの話を聞くのが嫌とか〉〈スーツ着て行って、第三者から言われて、で、こいつらからも言われてみたいな〉〈「勉強が面倒」はちょっとわからないですけど〉〈こいつ《就職活動情報サイト》とか、ホンマにもうイライラしますよ。〈もうカラオケ行って、うっしやーっていったのにその、《就職活動情報サイトからの》メールを見たどんにハア、…みたい〉〈楽しいときでなくとも、ほんまに普通のああ今日平凡やなー、て思いながらも、こいつら《就職活動情報サイト》から《メールが》来たら、ほんまに、テンションがた落ちですよ〉〈退会しようにもそのパスワードがわからないので〉〈3年の2月までは、合説とかありますよ、とか〉〈優しい感じで〉〈4月くらいから合説もだんだんなくなってきて、個人企業からXX《就職活動情報サイト》を介して、こう、来るみたい、そういうのありだしてから〉〈興味ない企業から来だして、も、ええけん、て〉〈チェック欄とかあるんですよ、どんな職種がいいとか〉〈そういうのやってるのに、全然関係ない、キャリアセンターみたいなことだして、だから、はっ？ってなって、もうええわ、って〉。「おしゃれをするために早く内定をとりたい」について：〈福祉とかって、結構髪型とかも髪の色もそんな言われならしくて、姉貴とかも言っていましたけど、だからそういうのもいいなーと思って〉〈自分のやりたいことが見つかったのは…まあ、姉貴とかおかんのおかげですよ〉〈父親だけが、福祉ってどうなんやろうな、みたいな話をして、自分から…そんな言わないんですけど、就職に関してって言わなかったんですけど、福祉ってどうやろと思ったら、おまえ合うんちゃうんかーと言われて〉〈《強い調子で》背中、押してほしかったんですよ…きっかけは、もう自分でわかってたから、それは、あともう一押ししてほしくて、…で、いろんな人に聞いて、自分、どうやろ？みたい〉〈やりがいを感じたいんだったら、そういう仕事もええんちゃうん！って言われて、そやな、って思って…そんならうち、介護行くわってって決めたんですよ〉〈《自分は、他者から》「かまってちゃん」《人にほおっておかれるのが嫌だということ》とか、思われないうんですけど〉〈普通に、かまってちゃんですよ〉。「自分はこういうのが

好き」ということを大事にしているように思えるがどうか：〈友だちにしても、自分の好きなミュージシャンにしても、家族とかも〉〈自分が大事やとか、ほんまに好きやって思ったら、守りますね、自分を犠牲にしても守りますね〉〈嫌いな人はホンマにどこん嫌いますからね〉。大学のキャリアセンターには行かないのに、ハローワークには行ける理由：〈ハローワークは面白いからです〉〈姉貴が先に行っちゃんと話聞いてるから〉〈安心やな、って思って、そしたらさらに、担当者が姉貴と一緒にやったから、あ、もう、これ、行けるわ、みたいな〉〈的確なアドバイスもくれるし、まず、…他者受容して〉〈《大学の》キャリア《センター》みたいに、「いや、も、それはどうかと思う」とかは言わないんで、否定から入らないのが〉〈《軽い会話も》できるような仲なんですよ、キャリアセン《大学のキャリアセンター》はもう、それがないですからね〉。

**総合的解釈** 最初に語られたクラスター1のイメージは、「就職活動への拒否」「面倒」「人と会うのにイライラし、誰しもウザイ」「明らかにマイナスのイメージ」であった。クラスター2のイメージは、「家族や友人の支え」「自分のため」「明らかにプラスのイメージ」であった。クラスター2内の上3つの項目は「第三者から自分に向けてのもの」で、下2つの項目は「自分自身からのもの」であった。項目単独のイメージでは、クラスター1がマイナスの項目、クラスター2がプラスの項目でまとまっており、〈全部正反対のことを言ってますよね〉という語りのおり、両クラスターは対照的なイメージで構成されており、対象者にとってクラスター2がより重要であった。

協力者の発言とクラスターの結節から、次の解釈が可能である。

クラスター1において、「《就職活動情報サイト》」などからメールが来たとき「勉強が面倒」「友人から就職に関して聞かれたとき」「キャリアセンターがウザイ!!」の4項目が並列で連結している。「就職活動情報サイト」からは協力者の生活に割り込むように〈興味ない企業から〉の情報をメールを送りつけられ、〈人によってはシャットダウンする〉〈その人に該当してる〉相手である「友人」からは聞かれたくないことを尋ねられ、「キャリアセンター」は〈自分らのことしか考えてない〉。これらはすべ

て、協力者に自由に考える間を与えず活動を急がせる一方的なものであり、協力者の就職活動へのやる気を阻害していた。これら4項目を包括するように「スーツを着たとき何か落ち着かず合説に行きたくなくなった」が結節している。この結節の仕方から「スーツ」は、やる気を阻害するものすべてにつながる象徴的なイメージと解釈できる。それは、普段着ない〈ピッチリした〉服で〈なーんか気持ち悪い〉ものであり、〈倒れるイメージない〉〈もっどしっかりした〉というそれまで抱いていた自己のイメージに反する〈なっさけねえ自分〉を突き付けてくるものであった。

クラスター2は、クラスター1と正反対のイメージでまとまっていると述べられた。項目間の連結からこのクラスターは2つの下位クラスターから構成されていると解釈できる。協力者の説明によれば、上に位置する下位クラスターは他者から自らへと向けられたものであった。ここに登場する、〈いつも一緒におる〉友人からの励ましや、自分のことを〈ちゃんと知ってくれてる〉親からの叱咤激励、助言によって、一度就職活動から遠ざかった協力者が再び進路を模索し始めていることが、補足質問に対する回答に表れている。

下に位置する下位クラスターは、協力者の説明によれば、自身のとらえ方や感じ方を表していた。その内容は協力者にとって肯定的なものであった。補足質問に対する回答において、〈姉貴とかおどんのおかげ〉で自分のやりたいことが見つかったと語られた。また、「おしゃれをするために早く内定をとりたい」の「おしゃれ」は、協力者のやる気を阻害するものの象徴である、着なければならぬ「スーツ」への反意であったと解釈できる。協力者にとっての「おしゃれ」とは、〈髪型とかも髪の色もそんな言われぬ〉職場で自由に服装を選ぶことであり、協力者にとって〈全部、嫌〉なスーツやヒールの着用を求められないことは、肯定的な意味を持っていたと考えられる。

クラスター2は、周囲の他者からの励ましによって進路を模索し直し、その結果自分のやりたいことにたどり着くことを表すと解釈できる。

以上から、クラスター1を「就職活動へのやる気を阻害するもの」、クラスター2を「就職活動の目標の明確化」と考えることができる。クラスター1

は消極的誘発性、クラスター2は積極的誘発性を表すといえる。消極的誘発性は就職活動へのやる気を弱め、積極的誘発性はやる気を強めていた。

第2回実施

第2回実施のデンドログラムを Figure 2 に示す。時間項目「過去」を含む上の6項目をクラスター1、「現在」「未来」を含む下の7項目をクラスター2に分けることを実施者が提案し、協力者が同意した。項目単独のイメージは、クラスター1はすべて否定的なイメージであり、クラスター2は5項目が肯定的なイメージ、「友人の内定が決まった時(強めた)」のみが中立的なイメージであった。

協力者によるクラスターの解釈 クラスター1: <これまた、マイナスですね。まあ、就職活動に対しての抵抗みたいな> <ま、拒否と似てますよね…> <だけどなんか、抵抗かな…やりたくねえ、みたいな> <《ずいぶん考えて》このときって、自分がしたいもの、なりたいものってのがなくて、うん…でも今は…やりたいことを見つけたんで、過去の、に入っただと思えます。確信はないと思えます…うん、ただなんとなく…前の自分とは、違うっていうか…やっと見つけた、みたいな>。クラスター2: <一言で言えば、ポジティブ?> <「友人の内定が決まった時」は、どっちかわかんないけど> <でも、

それ以下のほう> <なんか、以前の自分とは違う感じがみられますね> <「友人の内定」はね、どっちでも、どうでもいいんですよ、ま、おめでたいですけど、結局は自分ですからね> <ほんまに好きな人やってら…めっちゃ祝いますよね、自分が内定もらえてなくても、どうでもいい人は、あ、そうなん、ぐらいですね> <なんか…どうでもいいけど、なんか…イラッ! ってする部分はありますね> <がんばってるからこそ、とれるじゃないですか> <そこで真っ先に、はあ?とはならないですよ、まあおめでどうとは言うけど、ま、若干…イラッとする自分もいる、ていう矛盾> <自分の中でもやもやする、って感じですかね> <そうですね、うん納得いってるんですね、たぶん、自分の中では、ま、頑張ったからとれたんだよね、っていう> <ブラックな自分が《笑い》イラッてるんですよ> <この4つ《「自分の未来(大学卒業後)」「自分の現在(就職活動開始から大学卒業まで)」「おしゃれをするために早く内定をとりたかった時」「自分のやりたいことを見つけた時」》を見てると、…介護、って字が、パーン、て> <不思議やー、でもやっぱ、介護なんだなあって…今、なんか、ふと思いました> <介護のこと、全然わかんないんですけどね、ま、それはいずれ、その、「自分の未来」で学んでいきます> <これが営業とかだったら、うん、たぶん、こんな出てこないです> <やっぱ、介護かなー、人のためになるって、昔からそれは何となく思ってたし> <営業だど、おどんにも言われたんですけど> <めっちゃ腕上げても、違うところ行ったら意味ねーんよみたいな、でも介護は違うじゃろ、みたいな、腕に職つけりゃ、どこでも行けるんじゃろみたいな> <まあそういう、ポーンと、ね、一押しが、それが、ま、結構大事ですよ、一押し> <《介護職を目指すことを親しい友人に話して》「あー、意外じゃけど、でも…なんか、しっくりくる」って言われて> <《「協力者が」なんだかんだ言って、おじいさんおばあさん、大事にしどるが》っていわれて、はっ、こいつ見てくれどる、と思って> <ブログで、介護職を目指して、介護職を探して、介護士になって、ケアマネージャーになる、みたいな感じで書いたんですよ> <そしたら何か、コメントすぐ来て> <共感してくれる人多かったですね、人のためになる仕事をしたい、っていうのブログに書いて

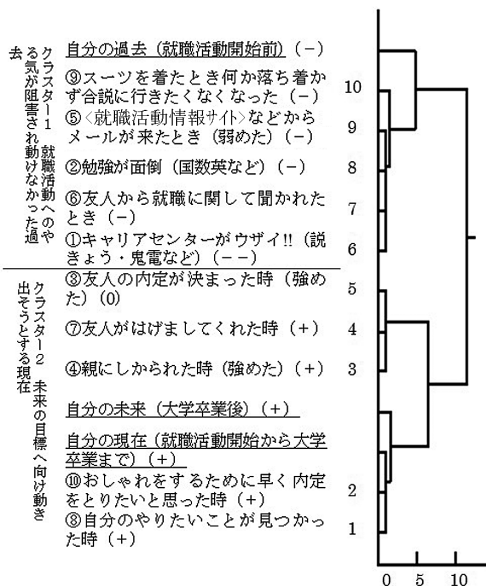


Figure 2 第2回のデンドログラム(縦軸数字は重要度順位, 丸数字は連想順位)

て、そしたら大体の人が、その考えってホンマ大事な、みたいな)。クラスター1と2の比較：〈真逆ですよ〉〈不快に感じたことを上は書いてて、下のほうは、もう、…うん、自分にとって、ポジティブになれる要素っていうか〉〈スーツ着てるのなんか、すっげえ、女って感じるじゃないですか、やなんですよ、それ〉〈自分の性格が入るなやっぱり、男っぽい性格でいうか〉〈とりあえず、過去は過去です〉。全体のイメージ：〈嫌なもの、嫌やし…なんか、いいものはいいいし、みたいな…なんか、自分の性格丸々出てるみたいな〉〈極端なんですよ、自分の性格が、もう、好きか嫌いかなんです〉。

**補足質問** 大学のキャリアセンターが嫌なのは、過去が関係しているのか：〈要するに、大人がホンマに嫌いなんですよ〉〈小学校のときに、あることが起きて…で、教師にぶたれて…自分が〉〈キャリアセンターがウザイっていうのは、でも、昔から嫌いだったような大人の、キャリア《センター》、含まれます。ま、大いに含まれますよ〉。クラスター2の中が、さらに2つの下位クラスターに分かれているように見えるが、理由は：〈一個《友人の内定が決まった時》だけはなんかちょっと違うみたいな、ほんとに、相手によるんですよ〉〈そこらへん《仲の良い友人》だったらうれしいですけどね…ようし、頑張ろう、となりますけどね…どうでもいい人は〉〈なんか…イラッてる部分はありますね〉〈どっちかいうと、もう「過去」ですよ〉。「友人から就職に関して聞かれたとき」とはどのような感じで聞かれるのか：〈や、就活しとん!?みたいな感じで、イラッてませんか? 言い方!って思いませんか?〉〈内定決まってない同士だと…や、就職活動、しとる?みたいな…すげえ柔らかい言い方なんですよ、お互い〉〈自分の場合は《就職試験を》受けてないからってのもあるんですよ〉〈どういうどこに行きたいとかもないし、やりたいものもなかったし、だから、自分の中で探してるけど出てこない、そのイライラもプラスされて、や、もう、自分、今探しとるけん、なんも言わんでくれる、みたいな〉

今まではやりたいことが全然なかったのか：〈全くなかったわけじゃなくて、それこそ、介護の前は営業《志望》だったんで〉〈今の若者って結構多いじゃないですか? そういう、もう、入れたらいいみたいな、どこか入れたらいい。自分も、それだっ

たんですよ〉〈やっぱ納得いなくて、営業?みたいな〉〈人のためになること? まあそういういろいろ考えてたら、結局は、介護につながるんですよ〉〈なんとか取ってとか言われて、はいどうぞって、ありがとう、その、すぐの返事がほしいんですよ!〉〈営業って、結果すぐに出ないじゃないですか、でも介護って、結果すぐに出るじゃないですか〉。ハローワークが連想項目に登場しない理由：〈《キャリアセンターが》ウザすぎてたぶんハローワークは出てこないですよ〉〈《キャリアセンターから、求人の中で》電話もらったんですけど〉〈週間後くらいに取りに行ったんですよ、やっぱ気になるなと思って、それで行ったのに〉〈もっと早く来んとー《来ないと(いけない)》、みたいな感じで言われて〉〈自分悪いんですけど、ただ、うるせえ!と思って、それもなんか、すっげえイライラして、しかも締切終わってたんですよ〉〈《キャリアセンターで》今、電話しねえ《しなさい》て言われて、あんたの前でするかー、と思って、とりあえず、家でやりまっすって言って〉〈《キャリアセンターから受け取った求人の紙を》もう、ぐっちゃぐっちゃにして、帰り学校で捨てました〉。

**総合的解釈** 協力者が評定した時間項目-自由連想項目間の距離から作成されたデンドログラム上で、「過去」はクラスター1、「現在」「未来」はクラスター2に含まれた。「過去」を含むクラスター1のイメージとして最初に語られたのは、「就職活動に対しての抵抗」であった。「現在」「未来」を含むクラスター2のイメージは、「ポジティブ」であった。これらは、項目としての「過去」「現在」「未来」それぞれの+のイメージと、2つのクラスターに含まれる他の項目の+のイメージによっても裏づけられる。全体のイメージは、嫌なものは嫌、いいものはいいい、という自分の性格が出ているとのことであった。

協力者の発言とクラスターの結節から、次の解釈が可能である。

就職活動を阻害する内容のクラスター1では、「友人から就職に関して聞かれ」ることで、自分が活動していないこと、やりたいことがみつからないことの〈イライラがプラスされ〉、〈自分、今探しとるけん、なんも言わんでくれる〉と感じていた。また、〈小学校のときに、あることが起きて〉〈大人がホン



マに嫌い)になり、昔から嫌いな大人の中に、大学のキャリアセンター(の人たち)が含まれた。そして、〈自分がしたいもの、なりたいものってのがなくて〉動けなかったというイメージであった。しかし、〈前の自分とは、違うっていうか…やっと思つた〉と語られたとおりこれらは過去のものとなった。

それはクラスター2が示すように、協力者が未来の目標を見出すに至ったからである。「おしゃれをするために早く内定をとりたかった時」「自分のやりたいことが見つかった時」を見たときに、〈介護って字が、パーン、で〉浮かんだと語られた。協力者にとって介護職は〈人のためになる〉仕事であり、やりたいことであった。2つの項目と「現在」は並列に結節し、調査時点という「現在」において協力者が目標を介護職と定めたことが示されている。

クラスター2に含まれる項目のうち、「友人の内定が決まった時(強めた)」「友人がはげましてくれた時」「親にしかられた時(強めた)」は並列に結節している。介護職と別の選択肢であった営業職との比較においては父親の助言と〈一押し〉が役割を果たした。介護職の選択には友人やブログのコメントによる支持が重要であった。これらは進路の模索を家族や友人が支えたことを表す。3項目の結節は、「現在」を含んで並列に結節する下の3項目と同じ距離で生じている。

これらのことから、クラスター2を構成する2つの下位クラスターが存在するといえる。家族や友人の支えのもとアイデンティティを模索するクラスターと、現在の職業選択を表すクラスターである。職業選択のクラスターは、時間項目「未来」を介して家族や友人の支えのクラスターと結節している。家族や友人に支えられ進路を模索すること、現在において目標が定まったことによって、〈(介護のことは)「自分の未来」で学んでいきます〉のように未来が展望されるという、そのプロセスがクラスター2内の項目間結節に表れたと解釈できる。

クラスター2の項目のうち、第1回で言及のなかった「友人の内定が決まった時」という項目の単独イメージは0であった。協力者は、〈頑張ったからどれたんだよね〉と思いつつ〈ブラックな自分がイラッとする〉〈もやもやする〉と複雑な気持ちであった。0となったのはプラスとマイナスの葛藤を表すと考えることができる。しかしまた、協力者に

とって〈ブラックな自分〉は自己のイメージとして簡単に受け入れることができなかつたとも考えられる。〈ブラックな自分〉のイメージを疎隔しようとしたために、プラスマイナスのない0であったという解釈も可能である。

以上から、クラスター1を「就職活動へのやる気が阻害され動けなかった過去」、クラスター2を「未来の目標へ向け動き出そうとする現在」と解釈できる。協力者の時間的展望は、否定的イメージの過去、肯定的イメージの現在と未来で構成されていた。協力者の未来の目標となった介護職のイメージは、〈なんとか取ってとか言われて、はいどうぞーって、ありがとう、その、すぐの返事がほしいんですよ!〉という、積極的誘発性を持っていた。

## 考 察

### 協力者にとっての誘発性

第1回目のデンドログラムは、項目の+、-、0のイメージから、消極的誘発性を持つクラスター1と積極的誘発性を持つクラスター2からなるクラスター構造といえる。協力者の発言から、2つのクラスターは「全部正反対」であり、クラスター1は「就職活動を阻害するもの」、クラスター2は「就職活動の目標の明確化」と解釈された。

消極的誘発性と積極的誘発性のクラスターに分かれたのは、「就職活動のやる気を強めたもの、弱めたもの」という刺激文によって連想を求めたためといえる。活動を順調に進めた大学生の事例(松浦, 2015)において、どちらの誘発性も実際には就職活動へのやる気を強める・弱める両方のイメージがあると語られた。しかし、本研究の協力者ではそれとは対照的に、誘発性の方向とやる気への影響が一次元的に対応した。クラスター1の消極的誘発性は活動へのやる気を弱める力、クラスター2の積極的誘発性はやる気を強める力であり、2つのどちらが勝るかによって行動としての就職活動を進められるかどうかが決定的であるという心理学的場が表れた。

続いて2つの誘発性の内容を考察する。

Super (1953) がキャリア発達の命題において自己概念を重要視したように、キャリア形成の問題は自己と深く関わる。Erikson(1959)の理論では、職業選択すなわち社会的役割の獲得はアイデンティティの確立において重要な意義を持つとされる。そして、

就職活動の意思決定の側面については、浦上(1996)がそれを「自己と職業の理解・統合」としたように、「自分はどのような人間か」という、アイデンティティ確立との関連が検討されてきた。

消極的誘発性を表すクラスター1の内容において、「就職活動情報サイト」「友人」「キャリアセンター」といった〈第三者〉たちは、協力者の希望に沿わない目標を提示し、そこに向かって就職活動を進めるよう一方的に求めてきた。協力者はそれらの「第三者」に対峙せざるをえなかっただけでなく、自らの「しっかりしたイメージ」、すなわちアイデンティティを脅かされた経験を象徴する「スーツ」の着用を求められた。そして〈人と会うのにイライラ〉〈誰しもウザイ〉と否定的感情を抱き、〈就活への拒否〉へと至った。このように協力者は、アイデンティティを守るために活動から退却したと考えられる。

積極的誘発性を表すクラスター2では、協力者は姉や父親からの助言や励ましを得て、自らのアイデンティティと進路をすり合わせながら、職業アイデンティティの確立を模索していた。自由連想項目にはないが、協力者の語りから、「ハローワーク」が「キャリアセンター」の代わりに役割を果たしたこともうかがえる。「ハローワーク」は「キャリアセンター」と対照的に、〈否定から入らない〉〈軽い会話もできる〉場所であり、活動を急がせることなく協力者のペースに合わせた援助を提供していた。

### 誘発性と時間的展望の働き

第2回実施のデンドログラムでは、クラスターのイメージが、過去への消極的誘発性を示す「就職活動へのやる気が阻害され動けなかった過去」、現在・未来への積極的誘発性を示す「未来の目標へ向け動き出そうとする現在」と解釈された。

本研究の手続きでは、時間項目「過去」「現在」「未来」について、日付や時刻として具体的に表せる時期を協力者に示していない。協力者のイメージ上で調査時より遡っていればすべて「過去」、調査時より後であればすべて「未来」となりうるものであり、クラスターで示される時間的展望の範囲は協力者に任されることになった。その結果、クラスター1は、小学生時代から調査時期直前にわたる長い期間の「過去」イメージから成り立っていた。

まず、第1回実施で抽出された「就職活動を阻害するもの」という消極的誘発性と、展望された過去

との結びつきがうかがえた。小学校時代の出来事をきっかけに大人を嫌いになり、それが就職活動中に関わるキャリアセンターの職員や就職サイトの否定的なイメージへと一般化され、消極的誘発性をさらに強めたと考えられる。

また、調査時点の協力者の状況からもたらされたと考えられる過去イメージも語られた。調査時点において就職活動の停滞から脱し、活動に取り組み始めていた協力者にとって、それまでの行動へ向かえていなかった自分は過去のものであった。

肯定的なイメージのクラスター2では、家族や友人の支えのクラスターと、目標を定めた現在を表すクラスターの2つが、「未来」によってつながっていた。協力者の未来のイメージは、目指す介護の仕事について〈ありがとう、その、すぐの返事がほしい〉という発言に代表されるように、積極的誘発性を持っていた。都筑(2007)は、大学3年生の進路選択の準備活動を始めた者の未来イメージがポジティブであることを見出した。都筑は準備活動を積極的に行うことで肯定的な時間的展望が形成されると考察した。本研究の協力者も、家族や友人に支えられてアイデンティティを模索することで肯定的な未来への展望が形成され、その積極的誘発性が協力者を活動へと向かわせたと考えられる。

以上から、本研究の協力者における時間的展望の働きについて、次のプロセスを考えることができる。過去展望に登場する他者の負のイメージが消極的誘発性を強め、就職活動からの退却をもたらした。しかし、現在において職業アイデンティティの模索と選択を行うことにより、新たな目標への未来展望が生まれた。未来展望には積極的誘発性があり、活動への動機づけをもたらした。

本研究における「過去の自分」「現在の自分」「未来の自分」を加えた2回目のPAC分析は、こうしたプロセスの解明に有効であったといえる。

### 就職活動を順調に進めた大学生の事例(松浦, 2015)との違い

本研究の事例を、松浦(2015)の報告した就職活動を順調に進めた大学生の事例と比較する。周囲の人々からの支えがやる気につながった点は、どちらの事例も同様であった。大きく異なっただけでなく、誘発性と「就職活動へのやる気」の関係であった。順調に進めた大学生の事例では、消極的誘発性と積極的

誘発性はどちらも「やる気」を強める・弱める両方の働きを持っていた。それに対し本研究の事例では、消極的誘発性はやる気を弱め、積極的誘発性がやる気を強めており、それぞれが一方の働きのみを持っていた。理由として、次の2点が考えられる。

1点目は誘発性の内容の相違である。順調に進めた事例における消極的誘発性は、履歴書作成の負担や不採用メールといった就職活動の手順そのものに付随する内容であり、それらの活動への挑戦は「やりがい」としてやる気を強める側面を持っていた。積極的誘発性は周囲の他者との関わりについての内容であった。それは「支え」だけではなく自らの動機づけを低める働きを持つことが示された。一方、本研究の事例では協力者は活動から一旦退却していたため、消極的誘発性としての活動の手順そのものについての内容はほとんどみられなかった。どちらの誘発性も、周囲の他者との関わりが多くを占めていた。他者との関わりのうち、やる気を弱める関わりイコール消極的誘発性であり、強める関わりイコール積極的誘発性であった。

2点目は、過去展望の働きの相違である。活動を順調に進めた大学生の事例では、過去の頑張った体験と就職活動との結びつきが語られた。展望された過去の経験によって、消極的誘発性を持つものに挑戦し乗り越えようとする動機づけがもたらされていた。それに対し、本研究の事例では、過去について展望された内容は活動を阻害する他者との関わりであり、消極的誘発性を強めるものでしかなかった。

#### 就職支援の実践への示唆

本研究の事例から見出されたのは、就職活動への動機づけを抑制する消極的誘発性と、動機づけを促進する積極的誘発性の、どちらが勝るかによって行動としての就職活動を進められるかどうかが決定されるという心理学的場であった。現在及び未来へと続く職業的アイデンティティの模索や選択が積極的誘発性を持つ未来展望をもたらした動機づけを促進することが示された。

本研究は単独事例を扱ったものではあるが、得られた結果は大学生への就職支援の実践への示唆を含む。日本では、企業による新規学卒時の一括採用という慣行のため、大学生が職業生活へと移行するためには、限られた期間において一斉に就職活動を行うよう求められる。そうした状況下で職業的アイデ

ンティティの模索や選択の時間が十分にとれず、結果として未来への展望をもたないまま行動を起こさなければならないケースが生じうる。そうしたケースでは、本研究の事例のように活動から退却してしまう可能性がある。

都筑(2007)は、時間的展望の基礎的認知能力にすぐれた者が進路選択の準備活動を活発に行い、その結果さらに肯定的な時間的展望が形成されると考えた。時間的展望の認知能力を高めることは、有効な支援の1つと考えられる。

将来展望を広げ、具体化する実践は、高校生や大学生・短大生を対象にさまざまに考案されている(白井, 2007)。また、白井(2007, 2010)の回想展望法では、他者から肯定的なフィードバックを受けることが重要視されている。本研究の事例でも、アイデンティティの模索において家族や友人の励まし、協力者によれば〈一押し〉が重要な役割を果たしていた。実践の際には肯定的なフィードバックを与えることが効果的といえる。

こうした実践に誘発性の観点を取り入れることが考えられる。自らにとって正の誘発性となるものをイメージさせ、それが就職活動や就職後に得られることをイメージするよう誘導することが有効であるかもしれない。積極的誘発性が消極的誘発性に勝れば、活動への動機づけは促進されるはずである。

#### 本研究の限界と課題

本研究は、就職活動において動く必要があるとわかっても動けない大学生の状態を、現在志向的な時間的展望の理論にもとづき検討した。そのため、未来志向的な時間的展望を構成する目標-手段という論理的・戦略的な構造についての検討は行わなかった。しかし、本研究の結果から、目標を選択できたことが活動の再開につながったことが示された。都筑(1999)は目標-手段関係から見た将来目標の階層の構造化が目標達成への意欲と関連することを示している。活動を起こせないでいる大学生の時間的展望における目標への階層構造を見出してゆくことも必要であろう。

また、若松(2012)は、大学生の職業・進路選択を意志決定の過程ととらえている。本研究のPAC分析でクラスター2に表れた目標の決定プロセスについて、意思決定モデルに沿った検討を行うことは有意義であると考えられる。

さらに本研究では、協力者のアイデンティティを守るために就職活動からの撤退が生じていたことが示された。こうした事態を自己心理学の立場、特に自己愛的脆弱性(上地・宮下, 2005)との関連から検討することも必要と考えられる。

これらの目的のための刺激文を作成して就職活動に困難を感じる大学生のPAC分析を行うことは、今後の課題といえる。

なお本研究では、協力者が就職活動初期に活動を開始しようとしながら行動できなくなったという経過を、事後的に確認したうえで協力を依頼した。そのため報告した事例は、就職活動停滞中のまさにその時点での時間的展望とはいえない。協力者から現在・未来の肯定的なイメージが得られたことは、協力者が再び就職活動へ動機づけられつつあるタイミングでの調査となったためと考えられる。就職活動初期の時点で本研究と同様の分析を行ったうえで、就職活動の経過を追跡し、活動停滞時点をとらえての調査が必要といえる。

また、当然ながら単独事例であることの限界がある。事例を積み重ねることが今後の課題である。

## 謝辞

本論文の審査の過程で、2名の匿名の査読者の方から大変貴重なご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 安達智子 2004 大学生のキャリア選択, その心理的背景と支援 日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
- 荒川 歩・安田裕子・サトウタツヤ 2012 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- エリクソン, E. H., 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房. (Erikson, E. H. 1959 *Identity and The Life Cycle*. International University Press.)
- 上地雄一郎・宮下一博 2005 コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91.
- レヴィン, K., 相良守次・小川 隆(訳) 1957 パーソナリティの力学説 岩波書店. (Lewin, K. (translated by Adams, D. K., & Zener, K. E.) 1935 *A Dynamic Theory of Personality*. New York: McGraw-Hill.)

レヴィン, K., 猪股佐登留(訳) 1979 社会科学における場の理論 増補版 誠心書房. (Lewin, K. (Edited by Cartwright, D.) 1951 *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers.)

松浦美晴 2015 就職活動への動機づけ要因となる誘発性と時間的展望: 女子大学生1名のPAC(個人別態度構造)分析 応用心理学研究, 41, 65-76.

内藤哲雄 1993 就職への態度と変容の個人別構造分析 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 46-49.

内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版.

内藤哲雄 2008 PAC分析を効果的に利用するために内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸 太一(編) PAC分析研究・実践集1 ナカニシヤ出版 pp. 1-33.

西村圭子・種市康太郎 2011 大学生の進路決定における心理のプロセスに関する記述的研究(1) 心理学研究: 健康心理学専攻・臨床心理学専攻(桜美林大学), 1, 46-60.

奥田雄一郎 2004 大学生の語りからみた職業選択時の時間的展望, 青年期の進路選択過程における時間的展望の縦断研究 中央大学大学院研究年報, 33, 167-180.

下村英雄 2001 進路選択 堀 洋道(監)・吉田富二雄(編) 心理測定尺度集II, 人間と社会のつながりをとらえる(対人関係・価値観) サイエンス社 pp. 334-364.

白井利明 1995 時間的展望と動機づけ, 未来が行動を動機づけるのか 心理学評論, 38, 194-213.

白井利明 2007 意欲を引き出す 都筑 学・白井利明(編) 時間的展望研究ハンドブック ナカニシヤ出版 pp. 135-139.

白井利明 2010 過去をくぐって未来を構想しキャリア形成を促す, 回想展望法の開発と活用 大阪教育大学紀要第IV部門 教育科学, 59, 97-113.

Super, D. E. 1953 A Theory of vocational development. *American Psychologist*, 8, 185-190.

都筑 学 1999 大学生の時間的展望, 構造モデルの心理学的検討 中央大学出版部.

都筑 学 2007 大学生の進路選択と時間的展望, 縦断的調査にもとづく検討 ナカニシヤ出版.

浦上昌則 1996 女子短大生の職業選択過程についての研究: 進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から 教育心理学研究, 44, 195-203.

若松養亮 2012 大学生におけるキャリア選択の遅延 風間書房.

(受稿: 2016.10.25; 受理: 2017.8.7)